日本古義

三

和書門
類
一七二九七
號
二三七
函
八
架
五
冊

内閣文庫
和書
類
一七二九七
號
五
冊
一五
架

内閣文庫
番號 和 17297
冊數 5 (3)
函號 154 230

国立公文書館
National Archives of Japan

日本古義卷之三

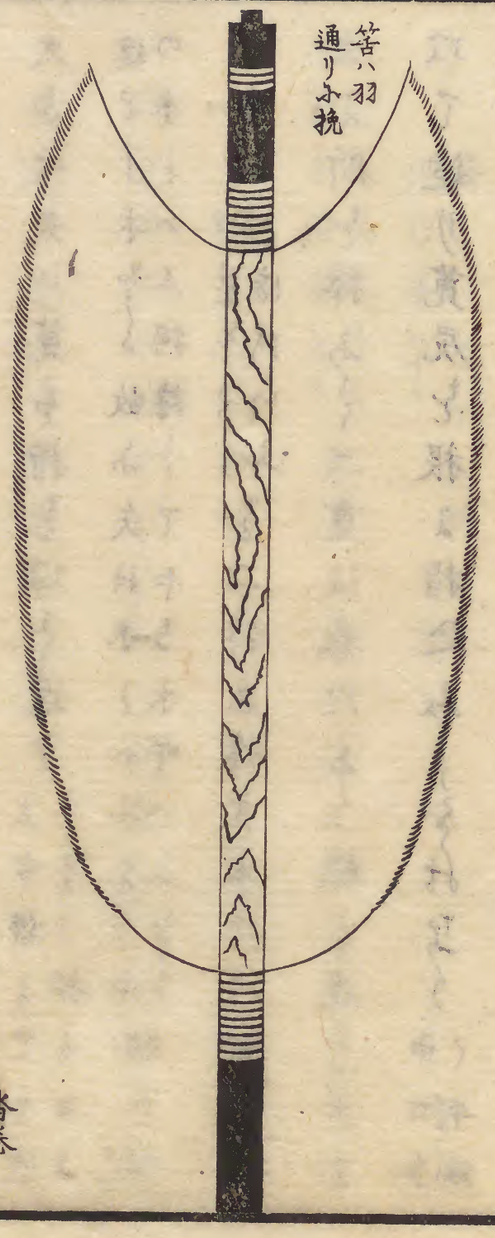
紀伊　高木尚三郎大伴正朝　述

太古之矢

天ノ羽羽矢といふを其矢の羽二羽あるを以て羽羽といふ後の代乃征矢も羽羽矢の遺風なり今の世ゐ所ゐ　太神宮御神寶の御矢を眞寫をし圖を左ゐ顯す　御矢の製篦黑塗羽中朱塗標金蒔繪矢束二尺四寸八分鷲白尾羽長ゲ四寸二羽但し生羽ハ作赤糸沓卷赤糸ゐ根を

浅草文庫
花廼家文庫

形を遺し来れるり今の世ふ至るまで　御遷宮の
時御神寶ハ御矢　御所より御進獻ハ時御矢ハ
箙を胡麻の油にて拭ふ例なり是上古柳箙を油
拭以て拭ひ為る古義なり此油ハて拭ふを柳箙
燥ぎて折やすきを油を以て潤ひ延喜式
乃民部省式ふ箭を造る柳箙四百二十隻人司ハ
油絹の料三百隻と見えたり　拭箙或節影箙ハ節
乾かさぬ為ふしてもの目ハ漆を滑塗を
を油拭以て拭ひ為るふ倣ひ古義なり



大神宮御神寶　御矢　寸法如圖

口巻といふを沓巻ハ事なり建久三年上洛
乃料ふ佐々木三郎盛綱野箭一腰作て進ら
ひ鷲ハ白尾を無文染羽とせ〻ハ拵作よし
て籐の口巻次ハ東鑑ふ見えたり

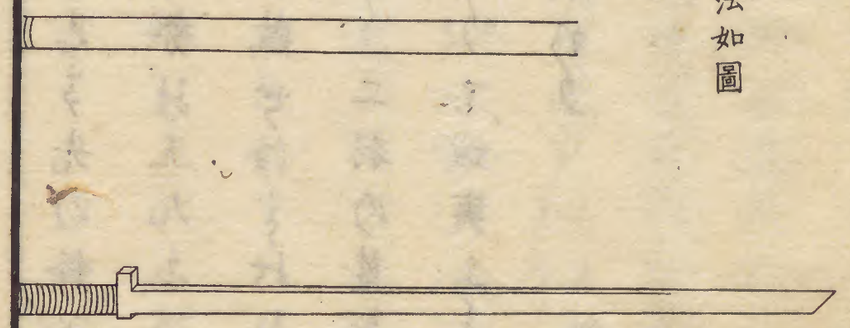
全羽とは本義

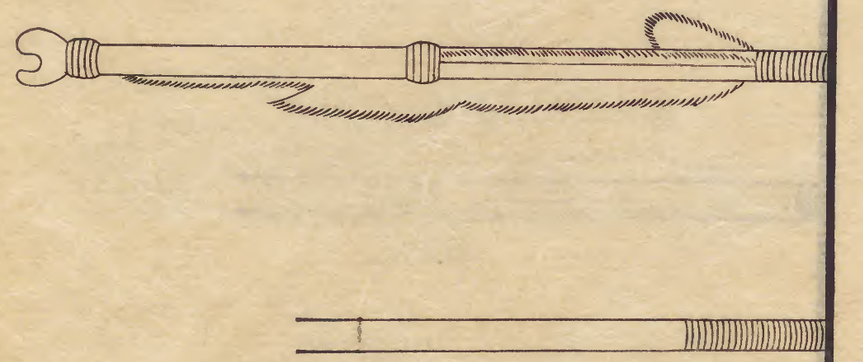
天孫鹿兒(カゴ)矢といふを鹿を射る矢なる後の代
の鹿矢(シヽヤ)日本書紀に獵箭とあり鹿兒矢孫遺風なり野矢とい
ふを鹿矢の類にして狩場に用ゆる矢なり
太古は矢ハ箙を檜を以て造り上古榊なども造
造るに木なる故に矢なる榊を矢に
の木といふ詞轉じてやなる木やいふなり羽を雉(キヽ)
の全羽莖をなるを二羽に作ぶ本作の羽莖孫
太なる所を樺にて二重に巻れあり根を鹿角を
以て造り箙尻を根に指込みしなり中心なる平鏑
孫ぶ老めるを野矢に孫ぶとて角鏑夫木抄ものよ

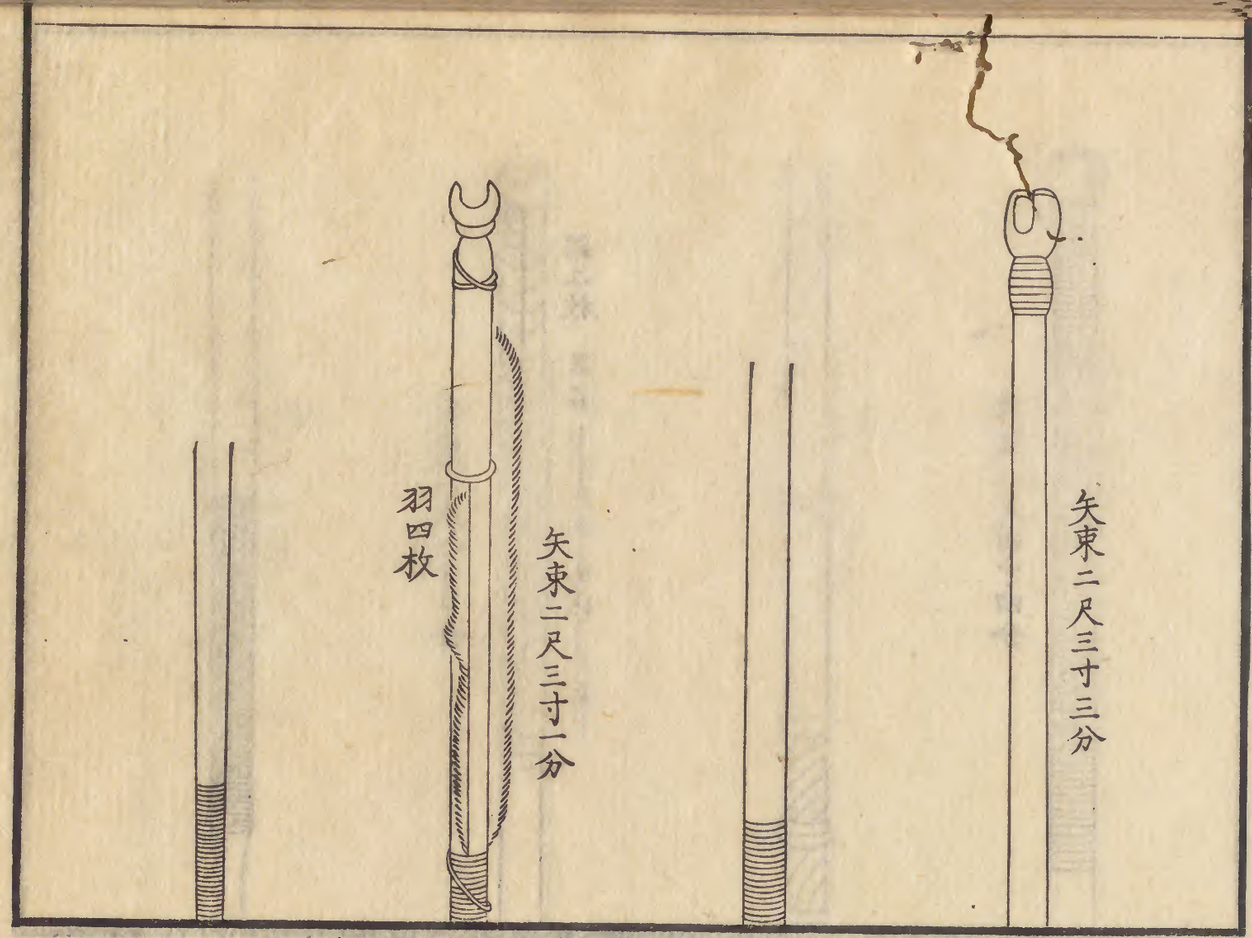
みしるものは此等孫類なるなる先の鋒に事記角鏑
孫ぶ鏑といふを根孫事なり正朝伊勢孫玉丸に乃に時正朝
射藝指南のなる彼國に滞留なり農家に藏せるなを見なり第
二　綏靖天皇孫御代なり二羽の莖をなりて四
羽成製次今の世なりて蝦夷に用ゆる矢
ハ是吾　國太古は遺製なり

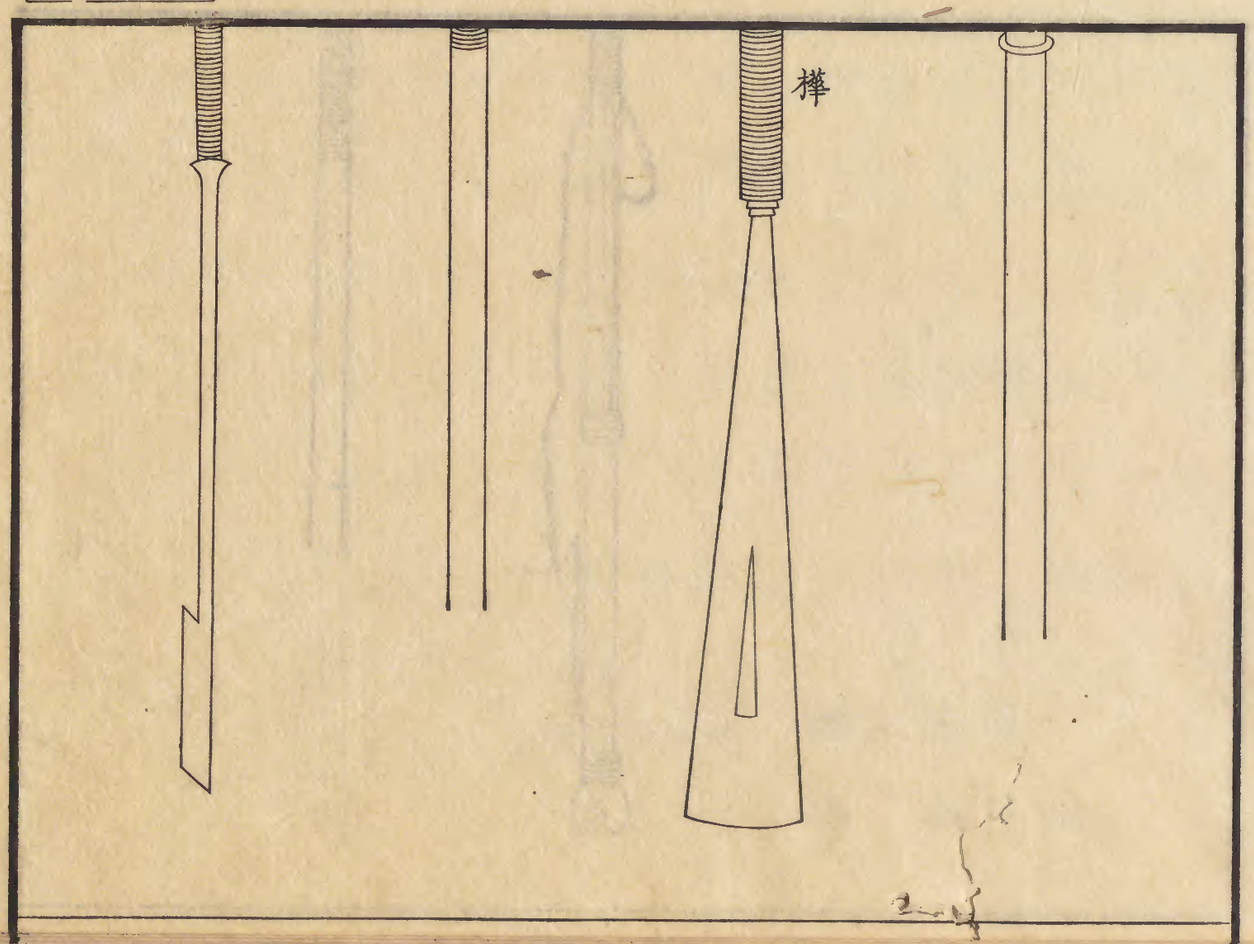
東大寺　倉

御矢之圖　各寸法如圖

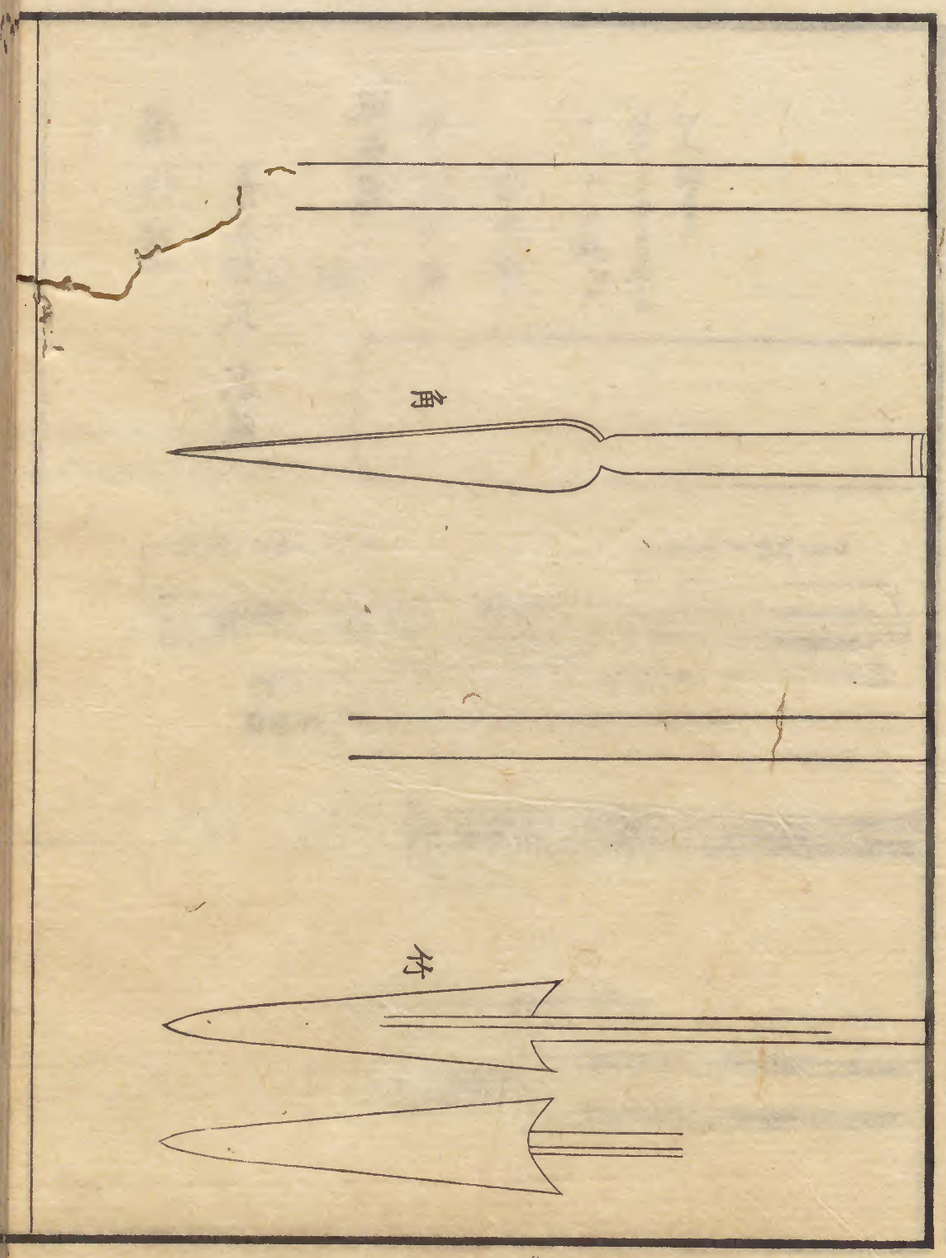


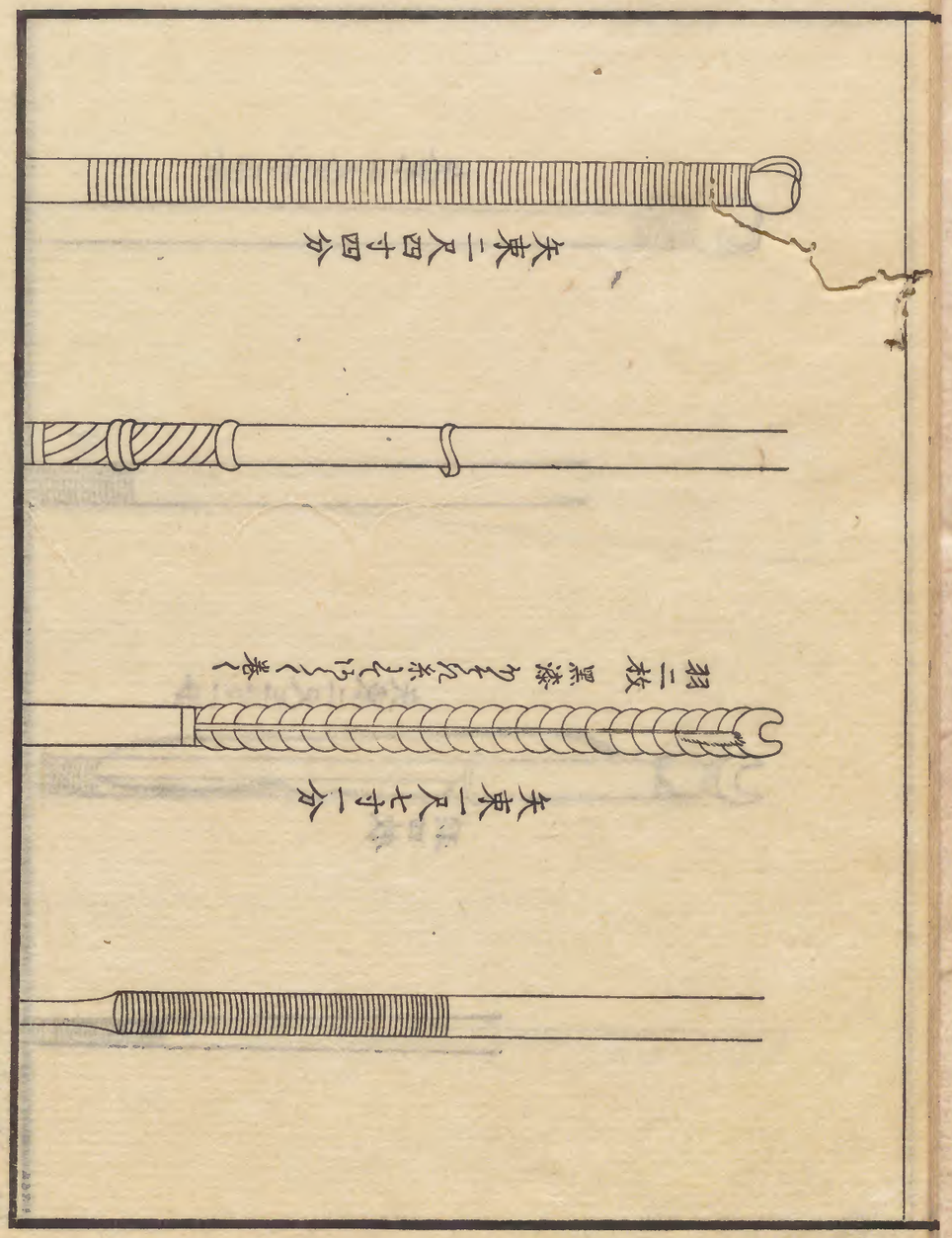






国立公文書館
National Archives of Japan


矢


羽二枚 黒漆ヲ以テ塗リ
矢束ニ八寸七分
矢束ニ八寸四十四分

越前藩

長谷部氏 家藏

蝦夷國

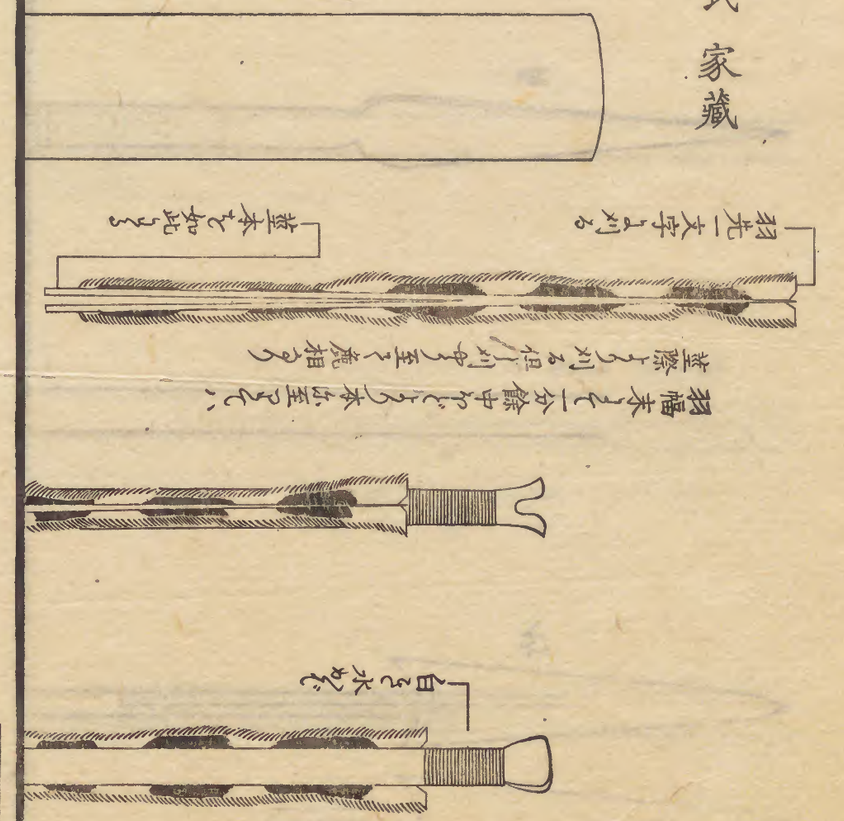
かりまた矢

大サ如圖

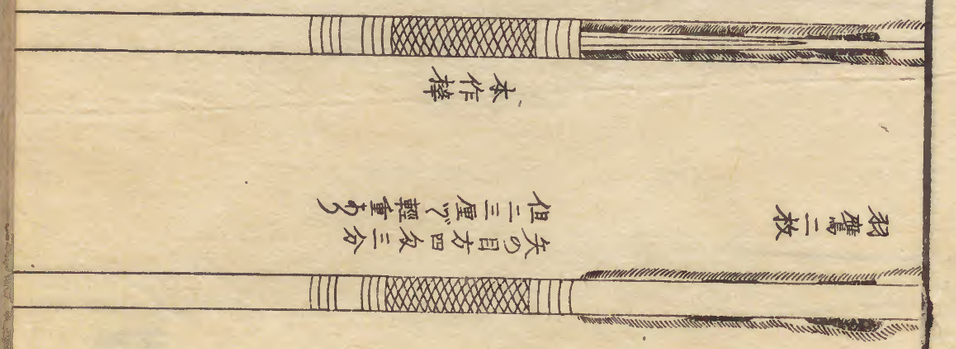
ト、キ、く疾ハキ

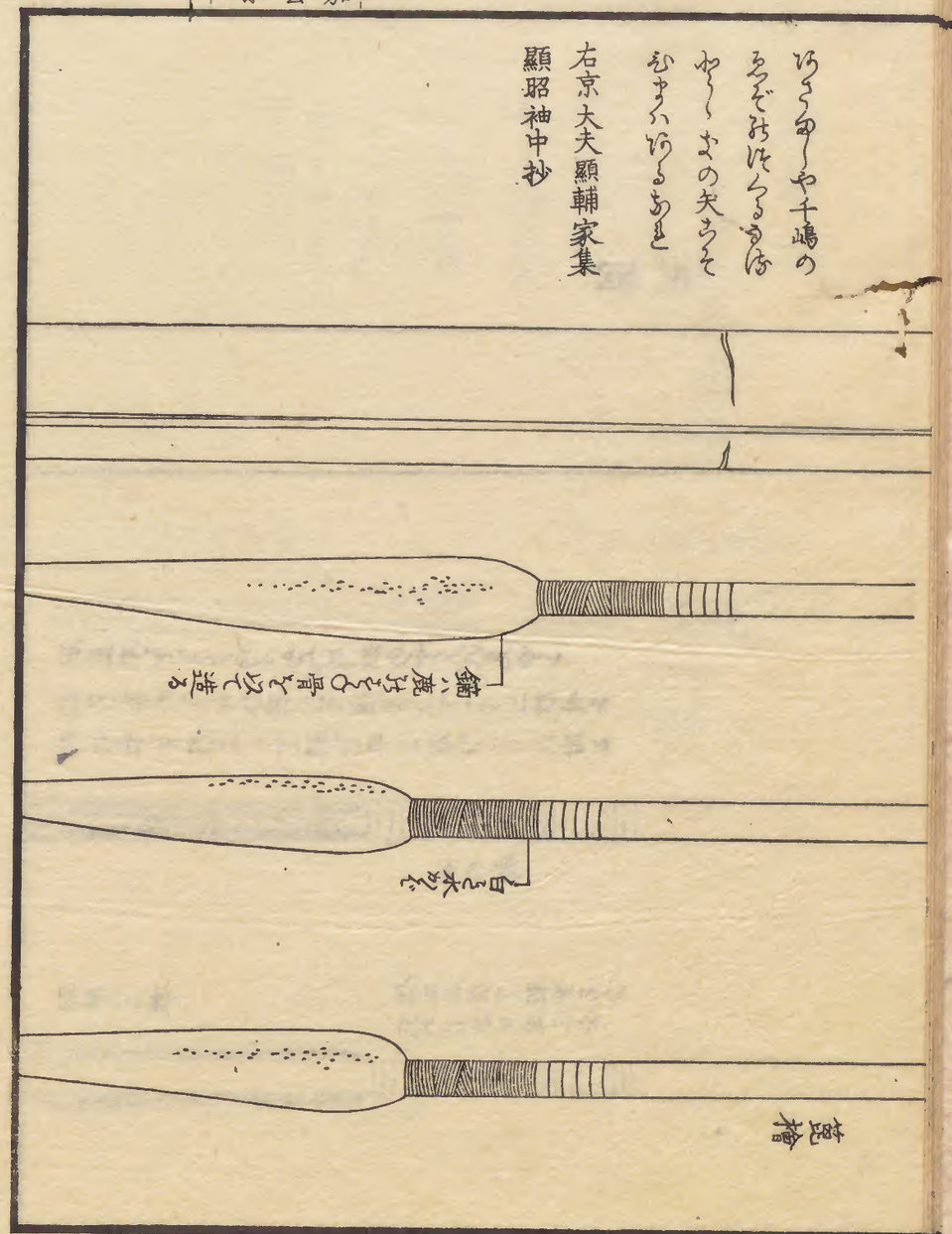
ありくまと矢と

いひ詞なり



矢筒

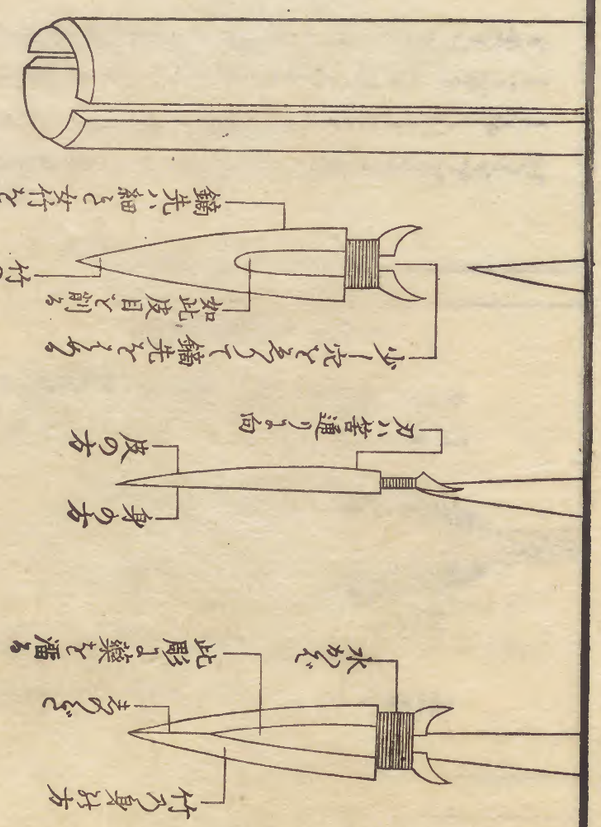




無とりハ加夫良朱と云
説古義圖ふて觀るべし

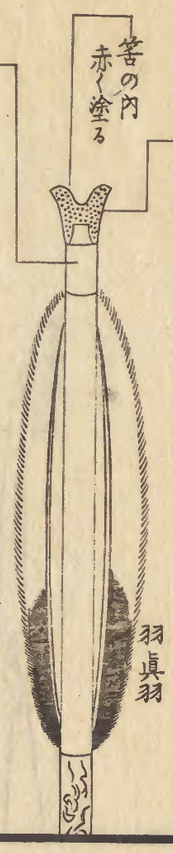
いろ〳〵や千嶋の
ろぐ〳〵ぬけたるなか
ゆ〳〵まの矢ろそ
むまハいるるあと

右京大夫顯輔家集
顯昭袖中抄



国立公文書館 National Archives of Japan

鮮矢之圖



筈ふ目あるうれる鮫をきせるう是早業ゑ矢あるゆくゝゝ、ゆえんと見えるう

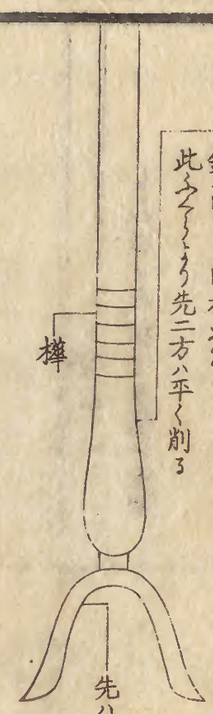
巻目水樺ゑ巻目をつげをも下ハ水牛ゑ筋うて巻き上ハ梅のかゝるう白ゑ水樺をきせるう但ハ魚膠ゆて付る

此矢ハ的射る矢なう

筈をつげをゑ矢も白き木るうつげをの矢を筈先ゑゝゝにをるハ大指乃腹と人指の脇うて筈ををゝみゝ引くゆゝゝ懸りゑあるふ先をゝゝゝるあう東大寺御矢の筈先ゑゝらあるもちれ上古角乃懸ゑゝ射ゑゝなう又蝦夷ゑれ矢筈も同前なう

羽乃形つげをも如此

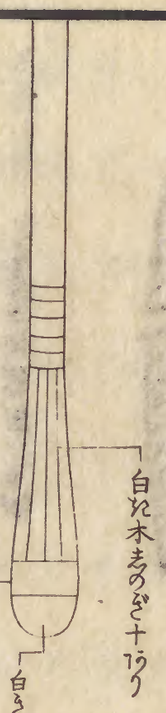
羽ハ魚膠ニベうて付る



鏑ハ堅き白木なう

此ゑゝゝゝう先二方ハ平く削る

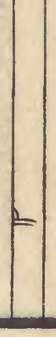
篦ハ白き紙をそう上ゑ方ゑを雲形を画き羽中うハうすゝき絹ゑゝう作う



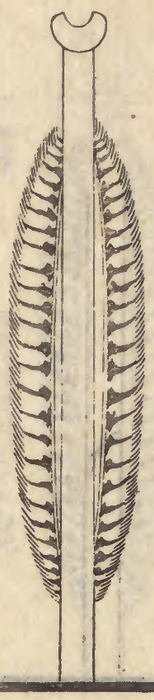
此矢ハ稽古ニ用ゆる矢なり

羽ハむくろ[illegible]として羽ハ莖を付[illegible]羽先より羽の
ひまゝ[illegible]を付くやうに引むくろ付るあり但し
いづれも魚膠少て付る也巻目を糸にて巻くこと[illegible]

此矢ハ用前ハ矢なり



圖ノ矢 四



[illegible]の矢も雉子ハ羽なり但し騎射の矢ハ
真羽を用ゆるあり羽をいづれも三立なり

尻籠ニ指し常ニ腰に附[illegible]を此矢なり

八目に鳴鏑といふを八目ハ目の數多をいふ
形り加夫良(カブラ)とは矢の根也事にもく矢尻を加夫
良をいふなり加夫良を株(カブ)にもて良ハ助語形り
菁に蕪子似あれ故ゑ加夫良といふあり太古の
鏑あを先ハあを形りもを不殺に矢ゑ多不伏(マツロハヌ)
諸神を追避(サク)ひあまふ矢なり　太神宮御寶(ミタカラ)に御
矢に根ゑれ代をを想ひ觀るべし先をにもあは
を第二　綏靖天皇に御代をり其製あり先をは
根先をいふなり蕪の根をいへを詞かをれる故

に蕪先をはいふ形空太古ゑを根をいをば根を
蕪といひし形り蕪をいふを根といふも同一意
なり又布株(カブ)らをを荒布(アラメ)に株(カブ)ゑ造をはもなり
萬葉集に比米加夫良(ヒメカブラ)とをを布株(カブ)に生ゑるを
篦ゑらをみ干堅むゑなり至を堅をを形り
目を明ゑる鏑を少れをの故ゑ別て八目の鳴鏑
に副持(トリソヘ)てを八目といふ詞を附ゑるあり今に世
に伝ゑる　御所の御矢をは孰も目を明(ケ)ざを鏑を
指しを此御矢を即羽羽矢の遺製をり御表指

鳴鏑矢を表矢に用ゆる古義

御隨身弓矢を帶する古義

矢を目を明る形り此御矢も八目に鳴鏑の遺製
形り

鳴鏑を征矢乃表矢に指副る事ハ　皇祖天の磐
座を出まして日向に高千穗乃嶽に降向ふ
時前驅に諸神天の梔弓天の羽羽矢を
八目に鳴鏑を副持御前に立けるに義に遺る
習ふ人皇の御代とかく　天子行幸乃
時御前に守護に御隨身弓矢を帶して供奉
も神の御前に弓矢を持て守護に隨身を置くも

鏑矢を征矢に表に指し事を古義

矢合せに鳴鏑を射る古義

此例に此鏑矢を征矢に表に指し事を古代合
戰乃始に矢合せの時此矢を射初る故に簸に
表に指次に故に表指はいふ形り又征矢の
上に指し故に上指ともいふ古事
記に日子國夫玖命を形りより先忌矢彈てを
ふまに建波邇安王射はもど得中ぬに爰
に國夫玖命に彈て矢を建波邇安王に即射る
死ぬを見えり是合戰に始を初で互に齋
慎て射交を故に忌矢はいふ形り後の世に矢

合乃鏑といふ義なるも此式の遺也なり此
鏑矢を大事の時に射る矢にもくく容易に射る矢
にはなりぬる故に又願書を副て神前に奉納を
矛を此矢なり義仲朝臣篠村八幡宮に籠られ
ある或、十郎藏人行家に太神宮へ進獻せ〻
皆上箭の鏑となり鎌倉殿石橋山合戰に始に高
倉宮乃令旨を御旗に横手の上に附け四郎惟重
なるを持ち父藏人頼隆白幣に上箭に附て御後
に候れと東鑑に記しなるハ是軍神勸請に幣に

鏑矢を守護矢と稱する古義

鳴鏑に造る木の古義

弭を矛といふ古義

て故に鳴鏑矢を貴て武運に守護矢と稱する歟に
て加茂皇大神宮の御神體を丹塗乃御鳴鏑を祀て奉る此鳴鏑に造る木を
比比良木を用ゆるなり比比良木は葉ハ末尖て
て惡魔を祓ふ性いひ傳なり（比比良木ハ花麻豆美神と古
事記に見えなり比比良木ハ神木なり）むかしなりに習なりて年
越乃夜門戸に此枝をなして禍を祓ふ又神の御
前に矛を建るなり故に比比良木矛といへて弭を
矛といへるも此因緣なり又桐にて造るを輕く
なりなり風を含て鳴音なり故に用ゆれなり

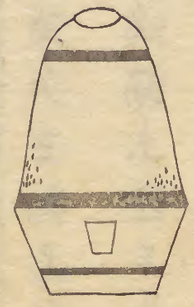
沼田目(マタメ)ハ鏑を鹿の角ハ皮目を殘し製するなり
其形好しなりを品々あり鏑の目を數多く明
きハ風を受ばして鳴音少なし目を三方ハ明
るを善とすべし目ハ立やうを内ハ廣くを外ハ
て風入るなり 此所を内へ廣く明るなり

沼田目之鳴鏑

夫木抄ニ

老めきハ野矢ハ
ちとて一角鏑
なりしるも
なやあるふり

鎌倉殿ハ代笠懸を射られしなり
挽目鏑と名けく如此平鏑ハ造るなり



日本古義三ノ十三

鏑矢ハ片羽(カタハ)四立羽をいふを作ル事を上古ハ遺製なり
古代ハを雉(キジ)乃羽を小羽ハ用ひるり 羽長短く小を故に小羽
といふ也此小羽を真羽といふを本の羽をいふ意ハ
て真ハ賞をハ詞なり太古ハ矢ハ雉乃全羽を以
く二羽ハ作ぎたるをハ故ハ雉の羽ハ小羽ハ用
ひ予古製を遺しをれなり然るを雉ハ羽禄(ノベ)ハ
しを故ハ後ハ鶚(ヤマドリ)かえるを鶚ハ羽乃生(ノ)一
文字ハ切く胡麻摺乃文(ノ)形を以賞して真羽ハを
いふなり 古鳥ハを胡麻摺乃文れし又鷲ハ大鳥
を真鳥といひ其羽ハ真羽と崇稱せり

小羽を連雀と用ゆる事

此小羽を眞羽といふを鶏の眞羽は賞していふ
はあらず本雉の羽を眞羽といへるに山
鳥の小羽をも眞羽といふ小羽を連雀を用ゆるといふ
を雉の羽の事なりあるを孔雀に似たる故に孔雀を連るといふ意なり
今の世ふつる御所の御矢の鏑を木と角と交
へつりて鹿の角の沼田目を殘して造る但し白
角あり木の鏑は白木のはゝ多くは又塗るもつる鏑の
大一寸ばかりにして鏑を孰も目を明けて篦を
拭篦黒塗篦節影等なり羽を鷲の白尾仕切羽等

不殺矢の古義

仕切羽の古義

なり其中仕切羽最多し各羽を二羽ゝ多生羽
羽裾を刈らずいふ赤色の生糸也あて作ぐ但し
本作なり二分ばかり下に同糸を以て二分ばかり
を巻あり是太古雉の全羽を作ぐ羽を本作の
羽莖の太き處を二重に巻て形を遺しあるか
を筈ハ木或水晶にて造て口を挽て筈口を挽て隨身弓と右
ハ持川も是不殺乃弓矢なり鏑先ハ多く鋒根あり蟇股の先を
少し矢束ハ二尺一寸ばかり三寸餘長短あり此
御矢これ鏑指あり但し目をふしの中ゆ仕切羽ハ仕切羽ハ烏と鷲と羽を鷹

表指ゆ鏑矢に角鷹の三文を作る古義

みな三文の如くふ切繼交へたる羽なり夫本抄ふ
去るり羽乃やをしなるけるあやをぐさをふ
をそむふ眞弓ゆりけ家とくめり是上古朝廷
ふ多五月五日の騎射叡覽ゆりし時ゆ歌なり
今ハ世山城國藤乃森ゆ神社ふくゆ御矢乃多く
五月五日ゆ流鏑馬ハ此古例なりゆ
乃れを此羽肅慎國(シヲタシ)を渡りし頃を珍しきをゆ
故ゑ此羽を賞翫して其羽の文ふ似をを用ひる
ゆ多ものあり此羽を肅慎國ゆ鷹なり表指乃鳴鏑ゑ角鷹(タカ)
の羽ゆ三文(フ)ゆ賞して用ゆるも此肅慎羽ゑ似ゆ
る羽ゆゑふ其頃より作來ゆなり故に此時ゑ
を角鷹乃羽を賞して無官ゆ者ハ上指(ウハサシ)の外是を

角鷹ゆ羽を常人用ひげる古義

石打ゆ征矢の古義

石打乃羽と名義

用ひ次御免ゆる者を格別なり射禮ふ無官乃者
ハ此羽ゆ矢を用ひげるを此古義あり實盛ゑ内
府宗盛ふ望を申せし石打ゆ征矢といふを即此
角鷹(タカ)ゆ羽三文の矢ゆり總一尻ゆ羽を指して石打
といふをゑを角鷹乃羽を
いふなり此角鷹を空をれゆ羽尾をを
石をを打て地ふ伏居る鳥ゆ飛しをを事ゆ
をゆぞ鷹百首ゑ米山乃谷行かをふ石打を
石打を飛鷹ゆ月日ゆ乃家とあり
上古ゆ角の大伊多都伎(イタツキ)角ハ細伊多都伎木乃伊
多都伎おどいふをのを　御所ゆ御矢の角ゑ目
ゆを鏑木乃蕪ハ先のゆ家ゆげるをゆなり其加

的矢とは事

夫良は大なるをもちをで大伊多都伎をいひ小なるをば細伊多都伎をいふなり今は世の角牙木鋒平鏑(イタツキ)などいふものも其名をかり用ひあれどもなほ的矢をいふを本ハ平鏑(イタツキ)といひしれども常に的射る矢をもれを的矢といひなりしあはものなり是皆其矢尻の名なれを其矢を名を呼ぶなり又上古錫にて造りし伊多都伎もなりしなりや夫木抄に

引立疾射手は諸人鞆(トモ)はなりてをもひつとはなり

麻麻伎とは古義

紙作の事

蟇股は名義

つをはなれるとをもひはまあるをは其矢を爪をもて直曲を試る状いふなり此歌をもめ孔伊多都伎を的矢はなりとをいへるは麻麻伎(ママキ)といへれを眞巻(ママキ)にして眞樺(マカバ)あるを作りて的矢をいふなり今は世に的矢を紙作をもはハ　御所の御弓は眞樺巻は紙にうへあれと同例なり

蟇股は矢ハ蟇股(カエルマタ)といふ名を蟇(カエル)に用ゆ股(マタ)は似るなり故にかく名くるなり(如圖)

鏑乃鳴音又ハ無は中に風を含むゆえに矢勢弱く利用は害となる事なるにより多無は用

鋒矢と表指小用ゆる古義

罰箭とり〻事

是罰の字に據り四方を討つとり〻

ひしゝり蕪巻を蕪乃形を遺しきれあり但し鏑先を蟇股ふ限りきれるものはあるべし　御所乃御矢ゆ蕪先も多く鋒根なり又鋒矢を表指ふ用ゆる事を古、頼義朝臣貞任追討の時貞任野艸ゑ毒をゆる其草ゆ喰ふ馬きれ斃きり頼義ゆきを愁ひゆきひて山神を拜しを曰是私の怨敵ふ向らば　天命にきりて征罰四方を討つといふ意あるべし矢入ゑ用ゆる矢を罰箭ふどいへりを加ふゆんぞ此難ゆるむやと時ゑ忽老翁現きるべし示して曰此武士ゆ中ふ角鷹の羽乃

意ふて名けしりのゆう

征矢製作の事

矢を持ゆるきゆあるべしむやニッの矢をきて陰陽ふかゆゆぎりてゆを祭ふるべし文ゆ黒白を陰陽ふとれ病馬生活せんと是きり角鷹羽ゆ矢を持ゆゑ於ハ兵馬乃難ふしといひるべ角鷹ゆ羽を作て陽矢陰矢の鋒矢を製きるべ表矢ゆ用ゆるなり故ふ馬守護矢馬慎箭に作るといひ傳へきり

征矢を製きるは吾心ふ少し重れと思ふを格恰ときべし輕撥ゆゆ要とする故きり又根を撫て弓ゆ力ゑ倍重きゆ格恰ときべし倍重れと

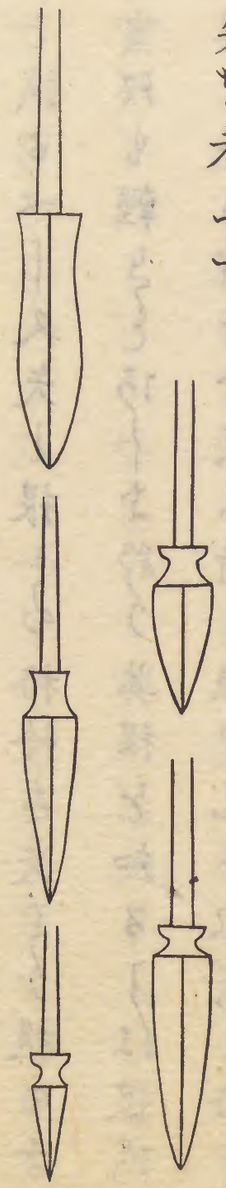
はゞ〳〵で七分力ゝ引ふ十四夜ゝ矢といふ事
り蟇股を竪横思ふ如くふ行ぶ〳〵てを利れ
ゝ故ゝ四立ゝ羽の矢ふ込て射る時り四立乃
矢を迴らぬ故ゝ横に櫂をバ横ゝ行て竪ふ仕込
で竪ゝ行くり然きども四立ゝ矢を上指り
外ふあをれゝ櫂を用ひる矢
り故て三立の矢ふ込て射るは竪平に仕込
むゝ又横平ゝ櫂るゝ三角斜ふ仕込むゝ其間數
ふ隨ひれ程を試るべきゝ孰矢

矢と根とれ格恰の事

矢の根指様ゝ事

をはりて行くをのれ故ふ如何やうに櫂て
も苦ーかゝぎれども是ハ射手ゝ心得り但ー
羽を内向外向と交へて附きではをぬをれふ
て試るべーー又矢と根との格恰を矢り根の方
重れも輕きをいゝなり其程を知るは根伐
櫂て筈乃所を一束ふ持て振て見るにををと
もれく持合れを思ふ程ふをるあり根を込む
るは篦かづきに革を用ひて凡一分計根伐抜出
ー仕込むり中心細くで四方に麥藁を以て詰

る物り中心長さハ弦より及ぶ皮革を用ひ一分
計り抜出し者れを矢働き強弱おく貫き〳〵正朝試
る小根を左之圖をれ〳〵貫き〳〵猶試〳〵て其得
失を考ふべし



劒尻楊枝陰刀類ハ切り刃を附ぬやうにして
用ゐべし蟇股平根刀類をなく刃を附くるれか
ゑ丸根といふを劒尻の中ゝ鎬(シノギ)おをいふなり

是根配ゑふ切〳〵よれ半ゑなり此丸根を飾り置
く箙ゑ指ゝるはなり用前ふを利ゆし鎬なき根
ハ貫ゆしれるり根と細く長さに利あり
四季艸ゑ木鋒といふを木ゆく造きを本と思
ふを非ゆりと書きしを不審ゆり木鋒ハ木ゆて
造きれをゆるれでゆを木鋒をいふゆを同書
ゑ圖をれしものを是構破(タテワリ)乃木鋒ゆ根なり

構破(タテワリ)矢尻之圖

篦櫛と根太巻とを移りふ大事なり此所なく木鋒を射當て
なり破る意なり先へ木鋒當て碎き其跡を櫛破を射貫く
なり是ハ先乃をもへ矢尻喰込ぬ考へなり

櫛破木鋒之圖

右櫛破を戰場なく櫛部などを射傷(ヤブ)る爲ゑ嗜む
矢なり是ハ矢入レ用ゆる木鋒ふ據て作り出
し者なり或金矢頭の益を兼ねなり此櫛破なる矢
を中古なれ物ふしてちし事益なれ者なり
四季艸糸野矢乃條を高忠聞書ゑ上指なは四目
を指をべし羽をなり作なりとなをぢなて作ハ

四目ふ事なり然るをなり作を四目になるなる野
矢ふ事なりをいなれしを不審なり若野矢乃事
おきで野矢の羽いなり作なををなるべなるが
なり又其次ゑ條ふなり作なは羽の端を刈びし
て其まま置事なりと書きなり是亦心得ぐなし
羽裾(ハツソ)を刈らげるをで生羽(イケハ)なはいへども是をと
を作をいふ事をなるなり作といふを雉(キジ)ふ全
羽を二羽糸作しを樵作(ヲリギ)といふなり樵ふ木なたと
へ(をれ)詞なり此樵作を四目(四ツなる故糸四目といふ也)其外一手矢

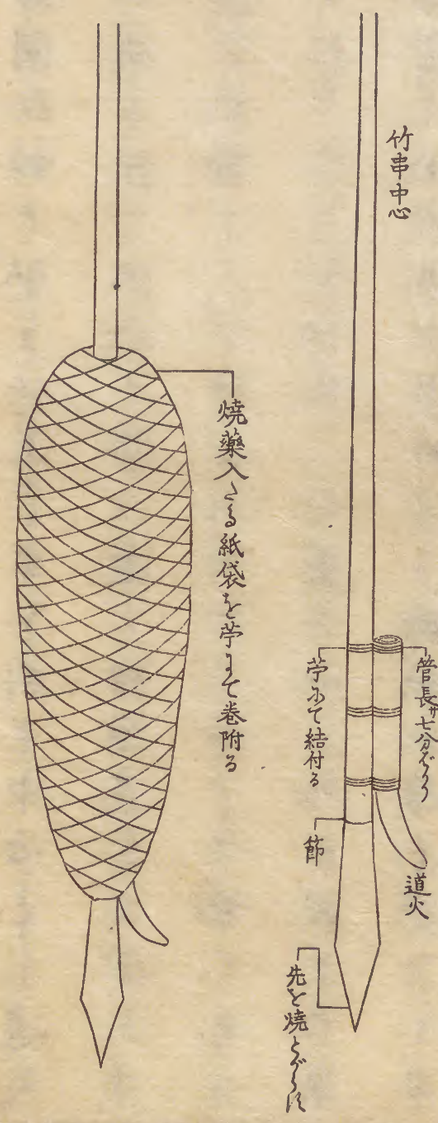
頭數矢頭等ハ作ぐ有り是等ハ鹿苑院殿
ハ代々乃製有り但し此雉の全羽を二羽ハ作
る太古ハ遺製を顯せしを最賞ベき事なり

樵作之圖（コリハギ）

太古ハ二羽を如此羽棟を立ビ羽を平ハ篦ニ附る
るものなり故ニ四羽ハ如くに見ゆるなり蝦夷乃
矢の如し但し羽乃表を付るを莖低きゆえなり

火矢ハ製左ハ圖ニ法者を正朝試ニ新ニ製を新
者なり　燒藥ハ方　焔硝百目　硫黃四十目
麻殼の灰十匁　鼠糞六匁　松脂十三匁　艾二

匁　碾茶（ヒキチヤ）一匁　樟腦二匁以上八品有り道火ハ
藥を　焔硝百目　硫黃卅五匁　灰八匁　艾九
匁なり藥ハ粗なり細なるを加減試ベし
管ハ皮を削て如此道火藥を紙ハ撚て込ミ管ニ
通し置けど燒藥へ急ハ火移らぬしてなれあり



右圖に如く堅き竹にて串を削り中心に道火の藥を紙に撚込み管に通し結附置き其上に燒藥を紙袋に入れて串に卷附き平竿にして堅く卷付るなり其上を澁糊に明礬を少し入れ紙にて張れなり又燒藥は薄糊にて練紙に厚く塗りて串卷附くも用ゆるなり又燒酎にて練てもよし吾矢束に短き矢にても中心の串を長くもて射らるなり敵は氣を奪ひ敵陣は破り防ぐ事火矢第一なるべし

引目鏑

引目鏑といふものは實朝將軍の代建保の頃に始て造出したるものなり凡此代にて小笠懸を射る事は專に習練なり小笠懸は大地に射付る事なれ鏑は目も多く損じ付る故に扱目（ヒキギメ）といふ事を考へる鏑の胴なり射付もて刺刀を以て細く目に裏より引目は付けなり是を目損じてを挽目なり少しばかり損じたる考へなり後に鏑先を平鏑に作りて笠懸を射る矢にもちひるなり

ふまを引目鏑といふなり又目の損じを紙を搆
へて見ぐるしなゆへに鏑を黑く塗て或目玉は
ぬりて稽古矢にもちひるなりこれを空鳴鏑（クウナカブラ）と名
ぢく目空（といふ詞なり）（てを助語形なり）目無鏑玉畧して
矢頭と云ふ矢頭をいふぬを遊箭乃司と信用して
矢の頭をいふ意なり矢頭はいひあらはして
て其後頼經將軍の代に至て犬追物を始められ
し時なり此引目鏑を大きく造て犬射る矢
ふ用ひられしなり是を犬射挽目と名ふなり

鏑を大體三ツ伏のをもてふして小きものをもて犬
ふはなく中る故ふ引目鏑を大きく造て鏑
大るれで多く風を含む故をのづから矢勢も弱
く犬ふ強く中らざるは工夫なり此引目をば本を
挽目鏑といひしなれども後ふをもて挽目とも
ういひ習なり中れ者なり此引目を射ふ式を
笠懸と犬追物の外に用ゐる式なり（誕生の式ふ用ゆるを別義也）
然るに中古（鹿苑院殿乃代）なり此矢を貴き太古の八
目乃鳴鏑に據て附會の妄說をふし神道者の

輩もて是を用ひく祈念祈禱みと具とかをり悲む
べし是をりして吾　國神武弓矢乃德を失ひ大
ふ古義を廢せり（軍器考み圖式ふ出せる山城國二宮山王ゑ納めある　天武天
皇乃引目といふをみを是偽物なり引目て上古
をりけるものありとみ證とせんが為め後人
偽作もの納めとれるの形り其引目乃長サ一尺二
寸と記せり是高忠が聞書に見えるふ相違なり
で一尺二寸ふもをべしをけるみて大具足
と名けく一尺二寸みを引目を造出をり又此大具
足ふ倣ひて一尺二寸ゑ拵えるの新をのふして是
大なる偽物なり但し上ふいふ一尺二寸ゑもを
べしとあるを傳寫乃誤あり一尺二尺
ふもをべしとけるを書誤てしなり

誕生之引目

注ふ云ふ所ハ畢竟其容ハ理をいふあり引ハ眞體を吾心ゑけり正誠の圓あり一心を以て行ふ時ハ其精神引に應じ又引ふ神あり同氣相感して其德を顯をゑあり

凡天地みと閒陰陽を離もく物あく陰陽昇降して
萬物育次引ゑ其德を天地と共ふして陰陽合一
みと靈器なをで（引ハ日ある時ゑ半月なり引滿る時
ハ陰陽みと兩儀備ゑれ引
乃眞體如此天地と共ふ生出ふ引ゑ天地の
表陰陽みと義なりをいふゑ此理をいふ形象　國
家みと守護と尊敬し誕生ゑ祝賀ふ引目鏑を射る
儀式を行ひく誕生の子みと武運長久を祝ゑ新義
形象
引ゑ天地乃表といふを先引矢を構へる新ゑを
（三首圓相の構へをいふ）既ふ天地開くふみと氣ぞを含ミ

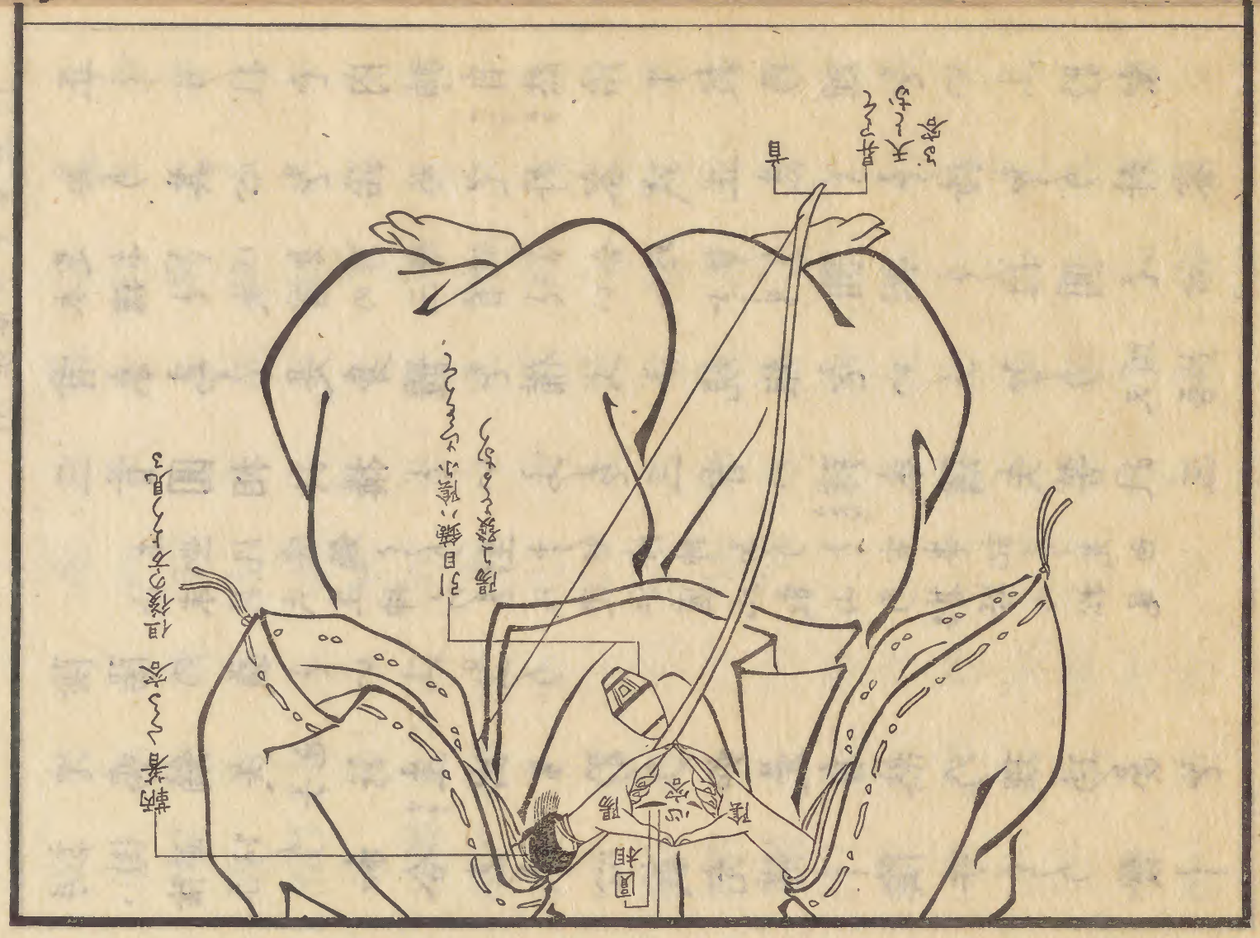
容(カタチ)なりそれより引ぬき打起し弦に上りあるを
處天なるれ容なり是を引渡しふ至り本彈に
下れ所地あるに容なり引満く圓(ニヽカ)ある容即天地
開事あるに容なり天地開きく鳴鏑矢に鳴出る是
即人に生出るなり如是天地の理自然と備る氣
處なるを天地の表といふなり
引は陰陽に義をいふを引は父なり弦を母なり
矢を子なり陽(オシ)手父也より起りて陰(カツ)手母也其氣を引
受く陽(オシ)手陰(カツ)手懸(カケ)手といふ詞轉してカツテとい
ふ押手は陽ふしく前にもくむ懸

身乃規矩ハ即心に規矩あり是外容を改めく心
ぬ正し身を治むるの要旨なり是射禮乃本なり

手は陰ふしく和合なくく心氣充満し陰手より發し
て後あり鳴鏑矢子也に生(ナリ)出る なり如是自然の理なるを
陰陽の義といふなり

山末に大主神をは近江國比叡山の葛(カツ)野の松尾ふ坐に鳴鏑より生(ウミ)ませに神ありと古事記に見ゆ

三首圓相に構といふを三首は弦(ウヅ)本彈矢筈に三
首ふなくく是身體を備ふる規矩をいふなり又吾頭と
本彈と矢筈の三首といへども是ふくは身に規矩に合ぬなり圓相くは圓を心
あり其心を治めて外容ぬ正なくくを治なり外容
正しくれで内神(ヲヅカラ)自然治まれの理をいふなり



大小小腸四本圖

三才圓相構之圖

誕生の祝賀に引目鏑を射る儀式を行ふ時あ鞆を著く事始以て第一の吉例とせはなり指懸を用ひぢるものを太古に指懸かを古義に據るなり吾　國神武弓矢の大神と稱し奉る　應神天皇譽田天皇と申し奉れ御降誕ましし時御腕の上に宍生て其形御母皇后の新羅を伐せ給ひし時に武を雄の裝して著れ給ひし御鞆に似るをもて譽田皇子と申し奉る鞆を譽田といふなり河内國譽田に坐す大神を譽田八幡宮と申し奉る又備後國鞆の浦に坐ます八幡宮の御神體を即御鞆を祀奉ば是鞆を著く事始第一

吉例とせるの古義なり皇祖臂に稜威の高鞆を佩を蒲牟振起あるし此鞆の音を以て天下を威し國家を治めるもの其高德を稱し奉りて不殺の弓矢といふなりされば稜威と唱へし鞆なり起りは詞あり鞆を吾　國神武弓矢の宗神　八幡大神の御神體と尊崇し奉れ神武第一の靈器なり上古には武士の守護にして身をまもる常に鞆を腰に付しるもなり神樂の取物の歌に　にの篠をいで

天降り給ふ

とりて古義

古乃佐ぎ[illegible]ぐ[illegible]れさぐれる鞆をう
のき[illegible]ぬぐ[illegible]り（日本書紀ふ兵衛を又上古と訓を）
朝廷ふく行れし射禮は必此鞆を著くを以
て禮とせしきあり是吾　國ふ舊習ふして射禮
第一ふ古義あり初誕生ふれ引目鏑を射る事
を　天孫天降（アメミマアマクダリ）しし時の義ふ據て此式を
行ふ[illegible]いふ義ふは[illegible]次日本書紀に見えし如
く　天孫天ふ磐座（イハクラ）を出まして（天磐座を日向國高千穂の鄉中ふ
あり今ふ世ふ至て其神跡現然と存を日向ふ
て正朝彼地ふ到りて拜見をる所なり）

日本古義三ノ二十八

襲（オソ）の高千穂峯（クシ）穂日（ホヒ）乃二上峯（フタガミノダケ）天ふ浮橋ふ到て[illegible]は
ひとりて天降（アモ）まし[illegible]次といふを　皇祖其所ふ下（クダリ）
向（ムカ）を給ふ[illegible]いふ事ふして（天は尊稱乃詞也）降誕の義
ふをうけ[illegible]此式を行ふ事ハ弓矢を吾　國神武
第一ふ重器ふ[illegible]ふ[illegible]て武運乃守護をして誕
生の祝賀ふ此式を行ふ義ふ[illegible]

日本古義卷之三　終

日本古義三ノ二十九

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan